

# 源氏物語

早蕨

紫式部

青空文庫



早さわらび蕨の歌を法師す君に似にずよき言葉を

ば知らぬめでたさ

(晶子)

「日の光林やぶ藪しわかねばいそのかみ古ふりにし里も花は咲きけり」  
 と言われる春であつたから、山莊のほとりのおいやかになつた  
 光を見ても、宇治の中の君は、どうして自分は今まで生きていら  
 れたのであろうと、現在を夢のようにばかり思われた。四季時々  
 の花の色も鳥の声も、明け暮れ共に見、共に聞き、それによつて  
 歌を作りかわすことをし、人生の心細さも苦しさも話し合うこと  
 で慰めを得ていた。それ以外に何の楽しみが自分にあつたであらう

う、美しいとすることも、身にしむことも語つて自身の感情を解してくれる姉君を、そのかたわらから死に奪われた人であつたから、暗い気持ちをどうすることもできず、父宮のお亡れかくになつた時の悲しみにややまさつた悲しさ恋しさに、日のたつのも悟らぬほど歎き続けているが、命数には定まつたものがあつて、死にたくても死なれぬのも人生の悲哀の一つであると見られた。

みでら御寺の阿闍梨あじやりの所から、

年が変わりましてのちどんな御様子でおいでになりますか。御み  
ほとけ仏へのお祈りは始終いたしております。今になりましたはあ

なた様お一方のために幸福であれと念じ続けるばかりです。

などという手紙を添え、わらび蕨や土筆つくしを風流な籠かごに入れ、その説明

としては、

これは童子どもが山に搜して御仏にささげたものです、初物です。

とも書かれてあつた。悪筆で次の歌などは おおぎよう大形に一字ずつ離して書いてある。

君にとてあまたの年をつみしかば常を忘れぬ初蕨なり

によおう女 王様に読んでお聞かせ申してください。

と女房あてにしてあつた。一所懸命に考え出した歌であろうと想像されて、つたない中に言つてある心を身にしむように中の君

は思い、筆任せに、それほど深くお思いにならぬことであろうと思われることを、多くの美しい言葉で飾ってお送りになる方の文よりもこのほうに心の引かれる気がして、涙さえこぼれてきたために、返事を自身で書いた。

この春はたれにか見せんなき人のかたみに摘める峰のさわらび

使いには纏頭てんとうが出された。

盛りの美しさを備えた人が、いろいろな物思いのために少し面おも瘦せもやのしたのもかえつて貴女きじよらしい艶えんな趣の添ったように見え、

あげまき  
総角

角の姫君にもよく似ていた。いつしよにいたころはどちらにも特殊な美しさがあつて、似ているように見えなかつたのであるが、今ではうかとしておれば大姫君であるという錯覚が起こるのを、遺骸いがいだけでも永ながくとどめてながめていられるものだつたならばと、朝夕に恋しがつていた源中納言の夫人になつておいでになればよかつたものを、運命のそれを許さなかつたのが惜しいと思ひ、女房たちは残念がつていた。かおる薫の家のほうから始終出て来る人があつてそちらのこともこちらの様子も双方でよく知つていた。まだ総角の姫君に死別した悲しみに茫ぼうぜん然となつていて、涙目の人になつていると中納言のことの言われているのを聞いて中の君は、中納言の姉君に持つていた愛は浅薄なものではなかつたと、

いつそう今になつて身にしむようにその人の恋が思われるのであつた。

ひようぶきよう

兵部卿の宮は宇治へお通いになることが近ごろになつていつそう困難になり、不可能にさえなつたために、中の君を京へ迎えようと決心をあそばした。

御所の内宴などがあつて騒がしいころを過ぎてから薫は、心一つに納めかねるような愁うれいも、その他のだれに話すことができようと思ひ、旬におみや宮の御殿をお訪たずねした。しめやかな早春の夕べの空の見える所に宮は出ておいでになつた。十三絃げんをお弾ひきになりながら、例のお好きな梅の香を愛してもいられたのである。薫はその梅の花の下の枝を少し折つて、手に持ちながらはいつて



来た。艶えんな感じが覚えられることであつた。宮はこの早春の夕べにふさわしい客をうれしくお思いになり、

折る人のこころに通ふ花なれや色にはいでず下ににほへる

とお言いになると、

「見る人にかごと寄せける花の枝を心してこそ折るべかりけれ

私が困ります」

薫も冗じょうだん談だんにしてこんなことを申し上げた。並べて見るに最

もよく似合つた若い貴人と見えた。しんみりとした話になつていて、どうしているかと宇治のことをまず宮はお聞きになつた。薫も恋人に死なれた悲しみを言い、初めから今までのその人に關する物思いの連続を、そのおりあのおりと、身にしむようにも、美しくも泣きながら、笑いながらというように話し出したのを、聞いておいでになつて、繊細な感情に富んでおいでになり、涙もろい癖の宮は、他人のことながらも、袖を絞るほどの涙をお流しになつて、熱心な受け答えをあそばされるのであつた。天もまた哀愁の人に同情するかのように、空を霞がぼんやりこめて、夜になつてからは烈しく風も吹き出し、まだ冬らしい寒さが寄つてきて灯も消えた。「春の夜の闇はあやなし」というようなたよりな

さではあつたが、話す人、聞く人もそれを障さわりにしてそのままにやむ話ではなかつた。どんなに語つても中納言は心の晴れることを覚えないままで深更になつた。世の中にまたたぐいもないような精神的愛に止まつたという薫の話を、必ずしも終わりまでそうではなかつたであろうと宮のお思いになるのも、御自身から割り出してお考えになるからであろう。そうではあるが他の点では御想像が穎えいびん敏で、薫の気持ちをよく理解され、悲しみも慰めるに足るほどな言葉をお出しになつた。一つは御容姿のお美しさが心をよく賺すかして、結ぼれの解けぬ歎きを少しずつ語つていかれるのは非常に気の楽になることのように薫に思われたのである。

宮も近日に中の君を京へお迎えになろうとすることで中納言へ

御相談をあそばされると、

「非常にけっこうなこととございます。あのままになりましたは私の責任になりますことと苦しく思っております。昔の人の名<sup>な</sup>残<sup>ごり</sup>の家も、あの女王があなた様のものであれば、今では私のお訪<sup>たず</sup>ねして行く名目に困っていたのでした。しかしただのお世話は十分に私がせねばならぬ方だと思っておりますが、そのことで御感情を害するようなことはないでしょうか」

と薫は言い、なお故人が以前に、自分と同じものと思えと言い、中の君と自分の結婚を望んだことも少しお話ししたが、あの中の君と兄<sup>きょうだい</sup>妹<sup>い</sup>のような心で語っていた寢室の一夜のことには触れなかつた。心の中では、こんなにも悲しまれる日の心の慰めとし

て妻に得ておくべきであつて、宮がなされようとするがごとく京へその人を迎えることもできたのであつたと、残念な気持ちかよ  
うやく深くなつていくのである。今はもう思つても何の効かいもない  
ことを、しかも始終それを思いつめておれば、なしてならぬこと  
をなしたい心も出てくるであらう、それは宮の御ため、中の君、  
自分のためにも人笑われなことに違ちがひないところこの人は反省し  
た。それにしても中の君が京へ移ることになつての仕度したくその他に  
ついて、自分のほかにだれも力になる人はないのであると薫は思  
い、手もとでいろいろな品の新調などをさせていた。

宇治でもきれいな若女房、童女などを捜して雇い入れ、女房た  
ちは幸福感に浸つているのであるが、いよいよ父宮の遺愛の宇治

の山莊を離れて行くことになるのかと中の君は心細くて歎かればかりする、そうかといつて寂しさに堪えてここに独居する決心もできそうになかった。宮から熱愛はしていながらもこのままでは自然に遠い仲になっていくかもしれないぬのをどう思っているかと恨んでおよこしになるのも少しお道理に思われるところもあつたので、どうすればよいかとばかり煩悶はんもんする中の君であつた。二月になつたらすぐということであつたから、近づくにしたがい咲く花の蕾つぼみも大きくふくらんでくるのを見ては、春の花のすべてを見ずに行くことが心残りに思われ、帰雁きがんのように霞かすみの山を捨てて行く先は、自身の家でもないことが不安で、宮の愛が永久に変わらぬものと見なされぬ心から寂しい未来も考えられてひそかに思い

悩んでいるのであった。

姉の服喪の期間は三月であつて、除服の禊みそぎを行なうことになつてゐるのも飽き足らぬことに中の君は思つた。母夫人とは顔も知らぬほどの縁であつたから、恋しいとは思ひようもなかつたが、そのかわりとして子の服喪を姉のためにしたい心であつたが、これは定まつたことであつてにはならなかつた。禊の日の女王の車、前駆を勤める人々、守刀などが薫のほうから送られた。

はかなしや霞かすみのころもたちしまに花の紐ひもとく折をりも来にけり

添えられたこの歌のように、春の花のいろいろに似た衣服も贈

られたのであつた。京へ移つて行つた日に入り用な纏頭てんとうに使う品、それらもあまり大形おおぎようには見せずこまごまと気をつけてそろえて届けられたのである。何かのおりには親身な志を見せる薫を喜んで、女房たちは、

「こんなにまでは御兄弟だつてなさるものではございませんよ」  
 などと中の君に教えるのであつた。こうした老いた女の心には物質的の補助ほどうほどありがたいものはないと深く思われるので、自然これを女によおう王に知らせようと努めるのである。若い女房たちは時々来る薫に親しみを持っていて、

「いよいよ姫君がほかの方の所へ行つておしまいになつては、どんなにあの方様が恋おぼしめしく思召すことでしょう」



と同情していた。

かおる  
薫自身は山莊の人の京へ立つのが明日という日の早朝に訪ねて来た。例の客室にはいつていて、月日が自然に恋人と自分を近づけていき、妻とした大姫君を、今度の中の君のようにして京へ迎えることを、自分のほうが先に期していたのであつたと思い、大姫君の生きていたころの様子、話した心を思い出して、絶対に自分を避けようとはせず、もつてのほかなどと自分をとがめるようなことはなかつたのに、自分の気弱さからついに友情以上のものをあの人にいだかせずに終わつたと考えると、胸が痛くさえなるほどに残念であつた。父宮の喪中にここから仏間にいるのをのぞいて見た北の襖からかみ子の穴も恋しく思い出されて、寄って行って見

だが、中の室は戸が皆おろしてあつて暗いために何も見えない。女房も薫の来たことによつて昔を思い出して泣いていた。中の君はましてとめどもなく流れる涙のために茫ぼうとなつて横たわつていた。

「伺うことのできませんでした間に、何をどうしたということはありませんが、絶えぬ思いの続きました一端でもお話をいたして心の慰めにさせていたただきたいと思ひます。例のように他人らしくお扱いにならないでください。いよいよ今と昔の相違を深く覚えることになつて悲しいでしょうから」

と薫から中の君へ取り次がせてきた。

「失礼だとは思われたくはないけれど、私は今気分も普通でなく

て、何だか苦しいのだから、いつそうそんなことでわからぬお返  
辞を申し上げたりすることになつてはならないと御遠慮がされる」

と言ひ、中の君は氣の進まぬふうであつたが、御好意に対して  
それではと女房らに諫められて、中の襖子の口の所で物越しの対  
談をすることにした。氣品よく艶で、今度はまた以前よりもひと  
きわまさつたと女房たちの目も驚くほど美しさがあつて、だれに  
もない清楚せいそな身のとりなしの備わつてゐる薫は、これ以上の男が  
この世にはあるまいと見えた。中の君はこの人に亡なき姉君のこと  
をさえまた恋しく思われ、身に沁しんで薫を見ていた。

「取り返しがたい方のことも、今日は縁起を祝わねばなりません  
からお話をさし控えたほうがよろしいでしょう」

と中納言は言い、ややしばらくして、また、

「今度おいでになるお邸やしきの近い所へ、私の家もまたすぐに移転することになっていきますから、夜中でも暁でもと能弁家がよく言いますように、何事がありましたも私へ御用をお言いくださいましたなら、生きておりますうちはどんなにもしてあなた様のために尽くそうと私は思っているのですが、あなたはどうか思ってくださいいますか、御迷惑にはお感じになりませんか。出すぎたお世話はいけないかもしれぬのですから、自分の考えをよいこととばかり信じても行なえませんか、お尋ねするのです」

こう言うと、

「この家を永久に離れたくないように思われます私は、近くへ来

るなどとおつしやるのを承っていますだけでも心が乱れまして、何とお返辞を申し上げてよろしいかもわかりません」

所々は言おうとする言葉も消して、非常に物悲しく思っている様子の見えるところなどもよく大姫君に似ているのを知って、自身の心からこの人を他へやることになったとくちおしく思われてならぬ薫であったが、効かのないことであつたから、あの以前のあの夜のことなどは話題にせず、そんなことは忘れてしまったのかと思われるほど平静なふうを見せていた。近い庭の紅梅の色も香もすぐれた木は、鶯うぐいすも見すごしがたいように啼ないて通るのは、まして「月やあらぬ春や昔の春ならぬ」という歎なげきをしている人たちの心を打つことであろうと思われた。さつと御簾みすを透かして吹

く風に、花の香と客の貴人のおいの混じつて立つのも花はなたちばな橘  
 ではないが昔恋しい心を誘つた。つれづれな生活の慰めにも人生  
 の悲しみを紛らわすためにも、紅梅の花は姉君の愛したものであ  
 ったと思うことが心からあふれて、

見る人もあらしにまよふ山里に昔覚ゆる花の香ぞする

と云うともなくほのかに絶え絶えに言うのを、薫はなつかしそ  
 うに自身の口にのせてから、

そで  
 袖ふれし梅は変はらぬにほひにてねごめうつろふ宿やことな

る

と自作を告げた。絶えない涙をぬぐい隠して、あまり多くは言わぬ薫であつた。

「またこんなふうにして何のお話も申し上げようと思ひます」と最後に言つて立つて行つた。

薫は中の君の出京について心得ておくことを女房たちに言い、山莊の留守居るすいにあの髭ひげ男おとこの侍などが残るであらうことを思つて、ここに近い領地の支配をする者と呼び寄せて、今後もここへそれらの人の生活に不足せぬほどの物を届けさせる用も命じた。

弁は中の君の移る二条の院へ従つて行こうとも思わず、さまざま

まのことにあつて自身の長生きするのを恨めしい気がするし、人が見ても無気味な老女と思うであろうから、もう自分は存在しないものと思われようと言つて、尼になつていた。そして引きこもつていた部屋へやから薫はしいて呼び出して、哀れに変わった面影のその人を見た。いつものように大姫君の話を薫はして、

「ここへは今後も時々私は来るつもりなのですが、知つた人がいなくなつては心細いのに、あなたがあとへ残つてくれるのは非常にうれしい」

など皆も言うことができず泣いてしまった。

「世の中をいといえばいとうほど延びてまいります命も恨めしゅうございますし、また私をどうなれとお思ひになつて、捨ててお死



になつたのかと女によおう王様も恨めしゆうございまして、人生に對

して片意地になつておりますのも罪の深いことと思われましてね」

と、尼になるまでの気持ちを弁の訴えるのも老いた女らしく一徹に聞こえるのであつたが、薫はよく言い慰めていた。非常に年は取つているが、昔の日に美しかつた名残なごりの髪を切り捨て後ろ梳ずきの尼額になつたために、かえつて少し若く見え雅味があるようにも思われた。故人の恋しさに堪えない心から、なぜあの人の望みどおりに尼にさせなかつたのであろう、そしてならあるいは命が助かつていたかもしれぬではないか、そして二人して御みほとけ仏に仕え、ますますこまやかな交情を作つていきたかつた、とこんなことさえ思われる薫には、弁の尼姿さえうらやまれてきて、身体からだ

を隠すようにしている几帳きちょうを少し横へ引きやって、親しみ深くいろいろな話をした。見た所はぼけたようではあるが、ものを言うけはい気配などに洗練された跡が見え、美しい若い日を持つていたことが想像される。

さきに立つ涙の川に身を投げば人におくれぬ命ならまし

悲しそうな表情で弁の尼は言った。

「それも罪の深いことになるのですよ、そんな死に方をしては極楽へ行けることがまれで、そして暗い中ちゆうちゆう有ゆうに長くないなければならなくなるのもつまりませんよ、いつさい空くうとあきらめるのがい

ちばんいいのですよ」

とも薫は教えた。

「身を投げん涙の川に沈みても恋しき瀬々に忘れしもせじ

どんな時が来れば少しでも心の慰むことが発見されるのだろう」  
と薫は言い、終わりもない哀愁をいだかせられる気持ちでした。  
帰って行く気もせず物思いを続けているうちに日も暮れたが、  
このまま泊まっていくことは人の疑いを招くことになりやすいか  
らと思ひ帰京した。

源中納言の悲しんでいた様子を中の君に語って、弁はいっそう

慰めがたいふうになっていた。他の女房たちは楽しいふうで、明日の用意に物を縫うのに夢中になっていたり、老いて醜くなつた顔に化粧をして座敷の中を歩き歩いていたりしている一方で弁はいよいよ世捨て人らしいふうを見せて、

人は皆いそぎ立つめる袖のうらに一人もしほをたるるあまかな

と中の君へ訴えた。

「しほたるるあまの衣に異なれやうきたる波に濡るる我が袖ぬ

世間へ出て人並みな幸福な生活が続けていけるとは思われ  
ないのだから、ことによつてはここをまた最後の隠れ家として私は  
帰つて来るつもりだから、そうなればまたあなたに逢うこと  
もできますが、しばらくでも別れ別れになつて、寂しいあなた  
の残るのを捨てていくかと思うと、私の進まない心はいつ  
そう進まなくなります。あなたのような姿になつた人だつても、  
絶対に人づきあいをしないものではないようなのですから  
ね、そうした人と同じ気持ちになつて、時々は私の所へも  
来てください」

などと女王はなつかしいふうに話していた。大姫君の使つて  
いて、なお用に立つつような手道具類は皆この人へのこして  
おくこと

に中の君はした。

「だれよりも深くお姉様を悲しんでいてくれるあなたを見ると、深い縁が前生からあったのではなからうかと、こんなことも思われて特別なものにあなたが見えます」

こんなことを言われて、いよいよ弁の尼は子供が母を恋しがって泣くように泣く。自身の気持ちをおさえる力も今はないように見えた。

山荘の中はきれいに片づき、荷物はできて、中の君の乗用車、その他の車が廊に寄せられた。前駆を勤める人の中に四位や五位が多かった。ひょうぶきよう兵部卿の宮御自身でも非常に迎えにおいでにな

りたかったのであるが、たいそうになつてはかえつて悪いであろ

うと、微行の形で新婦をお迎えになることを計らわれたのであつて、心配には思おぼしめ召された。源中納言のほうからも前駆を多人数よこしてあつた。だいたいのことだけは兵部卿の宮が手落ちなくお計りになつたのであるが、こまごまとした入り用の物、費用などは皆薰かおるが贈つたのであつた。

出立が早くできないでは日が暮れると女房らも言い、迎えの人たちも促すために、中の君はあわただしくて、今から行く所がどんな所かと思うことで不安な落ち着かぬ悲しい気持ちを抱きながら車上の人になつた。大輔たゆうという女房が、

ありふればうれしき瀬にも逢あひけるを身を宇治川に投げてま

しかば

と言つて、笑顔えがおをしているのを見ては、弁の尼の心境とはあまりにも相違したものであると中の君はうとましく思つた。もう一人の女房、

過ぎにしが恋しきことも忘れねど今日はた先まづも行く心かな

この二人はどちらも長くいた年寄りの女房で、皆大姫君付きになるのを希望した者であつたが、利己的に主人を変えて、今日は縁起のよいことより言つてはならぬと言葉を慎んでいるのもいや



な世の中であると思う中の君はものも言われなかった。道の長く  
 てけわしい山路であるのをはじめて知り、恨めしくばかり思つた  
 宮の通い路の途絶えも無理のない点もあるように思うことができ  
 た。白く出た七日の月の霞かすんだのを見て、遠い路みちに馴なれぬ女王によおう  
 は苦しさに歎たんそく息しながら、

ながむれば山より出いでて行く月も世に住みわびて山にこそ入  
 れ

と口ずさまれるのであつた。変わった境遇へこうして移つて行  
 つてそのあとはどうなるであらうとばかり危あやぶまれる思いに比べ

てみれば、今までのことは煩悶はんもんの数のうちでもなかつたように思われ、昨日きのうの世に帰りたくも思われた。

十時少し過ぎごろに二条の院へ着いた。まぶしい見も知らぬ宮殿の幾つともなく棟むねの別れた中門の中へ車は引き入れられ、そのころもう時を計つて宮は待つておいでになつたのであつたから、車の所へ御自身でお寄りになり、夫人をお抱きおろしになつた。

夫人の居間の装飾の輝くばかりであつたことは言うまでもないが、女房の部屋部屋にまで宮の御注意の行き届いた跡が見え、理想的な新婦の住居すまいが中の君を待つていたのである。

宮がどの程度に愛しておいでになるのか、妾しよわとしてか、情人としての御待遇があるかと世間で見ていた八の宮の姫君はこうして

にわかには兵部卿親王の夫人に定まってしまったのを見て、深くお愛しになつてゐるに違いないと世間も中の君をりっぱな女性として認め、かつ驚いた。

源中納言はこの二十日ごろに三条の宮へ移ることにしたいと思ひ、このごろは毎日そこへ来ていろいろな指図さしずをしていたのであるが、二条の院に近接した所であつたから、中の君の着く夜の気け配はいをよそながら知りたく思ひ、その日は夜がふけるまで、まだ人の住まぬ新築したばかりの家にとどまつてゐるうちに、迎えに出した前駆の人たちが歸つて来て、いろいろ報告した。兵部卿の宮が御満足なふうで新婦を御大切にお扱いになる御様子であるということを聞く薫は、うれしい氣のする一方ではさすがに、自身の

心からではあつたが得べき人を他へ行かせてしまったことの後悔が苦しいほど胸につのつてきて、取り返し得ることはできぬものであろうかと、こんなうめきに似たひとりごと独言も口から出た。

しなてるやにほの湖に漕こぐ船の真帆まほならねども相見しものを

とあの夜のことでちよつと悪く言つてみたい氣もした。

左大臣は六の君を兵部卿の宮に奉るのを、この二月にと思つていた所へ、こうした意外な人をそれより先にとつていうように夫人として堂々とお迎えになり、二条の院にばかりおいでになるようになったのを見て、不快がつているといふことをお聞きになつては、

また気の毒にお思われになる兵部卿の宮は手紙だけを時々六の君へ送つておいでになつた。裳着もぎの式の派手はでに行なわれることがすでに世間の噂うわさにさえなつていたから、日を延ばすのも見苦しいことに思われて二十幾日にその式はしてしまつた。一家の内輪どうしの中の縁組みは感心できぬものであるが、薫の中納言だけは他家の婿に取らせることは惜しい、六の君を改めてその人に娶めとらせようか、長く秘密にしていた宇治の愛人を失つて憂鬱ゆううつになつてゐるおりからでもあるからと左大臣は思つて、ある人に薫の意向を聞かせてみたが、人生のはかなさを実証したことに最近逢あつた自分は、結婚のことなどを思うことはできぬと相手にせぬ様子を聞き、どうして中納言までが懇切に自分のほうから言いだしたこ

とに氣のないような返辭をするのであろうと、一時は恨んだものの、兄弟ではあつても敬服せずにおられぬところの備わつた薫に、  
しいて六の君を娶らせることは断念した。

陽春の花盛りになつて、薫は近い二条の院の桜の梢こすえを見やる時にも「あさぢ原主なき宿のさくら花心やすくや風に散るらん」と  
宇治の山莊が思いやられて恋しいままに、  
匂におうみや宮をお訪ねしに行つた。宮はおおかたここにおいでになるようになって、貴人の夫人らしく中の君も住み馴なれたのを見て、その人の幸福を喜びながらも怪しいあこがれの心はそれにも消されなかつた。ますます中の君が恋しくなつていく。しかし本心は親切で、中の君を深く庇護ひごしなければならぬことを忘れなかつた。

宮と薫は何かとお話をし合っていたが、夕方に宮は御所へおいでになろうとして、車の仕度したくがなされ、前驅などが多く集まつて来たりしたために、客殿を立つて西の対の夫人の所へ薫はまわつて行つた。山荘の寂しい生活をしていた時に変わり、御簾みすの内のゆかしさが思われるような、落ち着いた高華な夫人の住居すまいがここに営まれていた。美しい童女の透き影かげの見えるのに声をかけて、中の君へ消息を取り次つぎがせると、褥しとねが出され、宇治時代からの女房で薫を知つたふうの人が来て返辞を伝えた。薫は、

「始終お近い所に住んでおりながら、何と申す用がなくて伺いますことは、なれなれしすぎたことだとかえつてお咎とがめを受けることになるかもしれませぬと御遠慮をしておりますうちに、世界も

変わってしまったようになりました。お庭の木の梢も霞かすみ越しに見ているのですから、身にしむ気のする時も多いのです」

と取り次がせた、物思わしそうにしている薫の姿の気の毒なのを中の君は見て、あの人が惜しむどおりに大姫君が生きていて、あの人の所に迎えられておれば、近い家のことで、始終消息ができ、花鳥につけても少し愉たのしい日送りができたであろうなどと、姉君を思い出すと、忍耐そのものが生活であつたような宇治の時のほうが、かえつて悲しみも忍びよかつたように思われ、故人の恋しさのつるばかりであつた。女房たちも、

「世間の習いどおりに、うとうとしくあの方様をお扱いになつてはなりません。今こうおなりあそばしてからこそ、あの方様の御



親切の並み並みでないことがおわかりになつた御感謝の心をお見せあそばすべきでございます」

こう言つて勧めていたのであつたが、にわか自身で話に出るようなことはなお恥ずかしくて中の君が躡ちゆうちよ躡ちよををしている時に、お出かけになろうとする宮が、夫人に言葉をかけるためにこの西の対へおいでになつた。きれいなお身なりで、化粧も施され、見えて見がいのある宮様であつた。薫のこちらに来ていたのを御覧になり、

「どうしてあんなによそよそしい席を与えていらつしやるのですか。あなたがたの所へはあまりにしすぎると思うほどの親切を見せていた人なのだからね。私のためには多少それは危険を感ずべ

きことではあつても、あんなに冷遇すれば男はかえつて反発的なことを起こすものですよ。近くへお呼びになつて昔話でもしたらいいでしょう」

こんなことを夫人に言われたのであるが、また、

「しかしあまり気を許して話し合うことはどうだろう。疑わしい心が下に見えますからね」

ともお言いになつたので、どうすればよいかわからぬようなめんどろさを中の君は感じた。自分にもまれな好意の寄せられたのを知っているのであつたから、今の身になつたからといって、うとうとしくできるものでない、あの人も言うように、姉君の代わりと見て、感謝している自分の心をあの人に見せうる機会があれ

ばよいと願っているがと中の君は思うものの、さすがに宮がとやかくと嫉妬しつとをあそばすのは苦しかった。



# 青空文庫情報

底本：「全訳源氏物語 下巻」角川文庫、角川書店

1972（昭和47）年2月25日改版初版発行

1995（平成7）年5月30日40版発行

※このファイルは、古典総合研究所 (<http://www.genji.co.jp/>) で入力されたものを、青空文庫形式にあらためて作成しました。

※校正には、2002（平成14）年4月10日44版を使用しました。

入力：上田英代

校正：kompass

2004年3月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 源氏物語

早蕨

2020年 7月13日 初版

## 奥付

発行 青空文庫

著者 紫式部

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>